

Title	無気力に互いを指さし合う不気味な十本の手 : ヴェルコールとコクトー
Author(s)	松田, 和之
Citation	Gallia. 2004, 43, p. 57-64
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/3712
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

無気力に互いを指さし合う不気味な十本の手 ヴェルコールとコクトー

松田 和之

虐殺される文学

“ベンによるレジスタンス”を不屈の精神で具現化した「深夜叢書」その記念すべき第一巻にあたる『海の沈黙』（1942）は、ナチスの兵士たちの襲撃に遭い非業の死をとげた詩人サン＝ポール＝ルー（1861 - 1940）に捧げられている。作家シャルル・ヴィルドラック（1882 - 1971）から彼の一家を襲った悲劇について聞かされたヴェルコール（1902 - 1991）は、すでに印刷段階にあった自らの処女作に急遽「虐殺された詩人／サン＝ポール＝ルーの思い出に（SM, p.25）」という献辞を添えたのである²⁾。ナチスの犠牲者への献辞がファシズムの告発というこの作品の根本的なテーマに呼応することは言を俟たないが、殉難したレジスタンスの闘士たちではなく、あえて「ろくにその作品を読んだこともない」ノルマンディーの老詩人に、ヴェルコールは自著を捧げている。それは決して気まぐれのなせるわざではなかった。

『海の沈黙』には“文学の国”フランスを支えてきた古今の詩人や小説家、劇作家の名前が頻出する。その大部分はナチスの将校ヴェルネル・フォン・エブレナクの“独白”中に含まれる。進駐軍の一員として、彼は小説の語り手が姪と二人で静かに暮らす家屋の二階に住みこんでいる。頑に沈黙を守る二人のフランス人と夢見がちに独仏両国の「幸福な結婚」について語るドイツ人。語り手たちが就寝前のひと時を過ごす一階の居間が彼らの奇妙な交流の場となる。芸術に造詣が深いエブレナクは、居間の本棚に収められた古今のフランス文学のコレクションにすっかり魅了される。彼が本の背表紙に刻まれた作者名を夢中になって読み上げる場面では、わずかに数行の間に22人も作家名が記されている（SM, pp.38-39）。

こうした執拗なまでの作家名への言及が意味するところは、作品の結末部で自ずと明らかになる。ナチスに洗脳された旧友たちの口から、エブレナクはある事実を知らされる。それはフランスの「魂」をシステムチックに抹殺しようとする計略だった。ナチズムの本質を思い知らされた独仏融和論者は、自ら志願して地獄の東部戦線へと旅立つ。エブレナクを絶望させ死地へと駆り立てたのは、フラ

1) Vercors, *Le Silence de la mer*, Albin Michel, 1951. 本論においてSMの記号とともに記載される頁数は、すべてこのテキストのものである。なお引用文の和訳に際しては、ヴェルコール『海の沈黙』（河野與一訳、岩波文庫、1973年）を参照した。

2) サン＝ポール＝ルー一家の悲劇については、彼と親交があった親日家の詩人ルネ・ド・ベルヴァルの回想に詳しい（Cf. ルネ・ド・ベルヴァル『パリ1930年代 ―詩人の回想―』、矢島翠訳、岩波新書、1981年）。

ンスにおけるナチスの禁書政策の実態である。唇を震わせながら、彼は語り手たちに「堪え難い確認事項」を告げる。

彼らはお国の作家たちのご機嫌をとっています。しかし同時に、ベルギーでもオランダでも、われわれの軍隊が占領しているあらゆる国で、すでに通行止めの柵が作られているのです。フランスの本はもうどんな本もそこを通過することができません。ただし、技術書や屈折光学の教科書や鋼化法の公式集などは例外ですが……。一般的な教養・文化関係の著作は全部駄目です。一冊たりとも！（*SM*, pp.63-64）

「一冊たりとも」という言葉に付された感嘆符からは、作者の憤りが伝わってくる。作家志望の素描画家ジャン・ブリュレルにとって、欺瞞に満ちたナチスの禁書政策は到底見過ごすことのできないものだった。レジスタンスの聖地に因んだペンネームで筆を染めた彼は、巧妙に仕組まれた文化統制の脅威をエブレナクの挫折をとおして描き出そうとしたのである。

禁書の烙印を押された書物の数々に対する強い哀惜の念が『海の沈黙』の端々から感じられる。作家や詩人の名前が随所に散りばめられたこの小説には、時代の闇に葬り去られようとしていた彼らの文学へのオマージュとしての意味合いが、確かに込められている。サン＝ポール＝ルーに捧げられた献辞は、ナチスによりまさに「虐殺され」つつあったフランス文学に対する献辞でもあった。

『海の沈黙』の中の「ジャン・コクトー」

『海の沈黙』中で言及される文学者の名前が概ねエブレナクの独白中に見られることは先に指摘したが、本論で注目したいのはその唯一の例外、つまり地の文（語り手の回想）中に思わぬかたちで立ち現れる詩人の名前である³⁾。問題の箇所を見てみよう。

姪は絹のスカーフで両肩を被っていた。そのスカーフにはジャン・コクトーがデザインした不気味な十本の手が印刷されている。それらは無気力に互いを指さし合っていた（*SM*, p.57）

語り手の姪のスカーフに施されたデザインの作者としてコクトー（1889 - 1963）の名前がフルネームで明記されている。“二十の顔を持つ男”と呼ばれたコクトーの画家・デザイナーとしての“顔”に関する言及だが、いささか唐突の感は否めない。ヴェルコールとコクトーは占領下のパリで苦難の時代を生きたいわば同業者である。いまだ存命中の同時代人の実名を小説に取り込むことに、作者は当然

3) 厳密に言えば、もうひとり、俳優で演出家のルイ・ジュヴェ（1887 - 1951）への言及が、やはり地の文中に見られる。読者は全編のちょうど四分の三を過ぎたところで初めて、エブレナクの容姿が名優ルイ・ジュヴェに似ていることを知らされるのである。この言及にはいかなる意図が込められているのか、詳しい検討は別稿に譲りたい。

慎重にならざるをえない。あえて言及するだけの文脈上の必然性が感じられない場合は尚更だろう。では一体ヴェルコールはいかなる意図をもって、一見不要とも思えるコクトーの名前を作中に織り込んだのだろうか。この問いに答えるためには、まず『海の沈黙』という作品の特異な性格について充分理解しておく必要がある。

メッセージとしての小説

レジスタンス文学の白眉として『海の沈黙』は文学史上に独自の位置を占めるが、この作品が今日なお読者を惹きつける要因のひとつに、ジョゼフ・コンラッド(1857 - 1924)に範を仰いだ簡明な文体の魅力が挙げられる。この小説は、登場人物間の通常の会話を欠いた特異な形態をとるものの、その本質においてフランスの伝統的な心理小説の系譜に連なる作品であると言えるだろう。だが、そうした異常な状況設定、そして何よりも作品を支配する“雄弁な沈黙”こそは、過酷な時代の産物にほかならない。レジスタンスの精神を宿した文学作品として異彩を放つこの小説は、かつて、文字通り命懸けのレジスタンスの行為そのものだった。

ヴェルコールは後年の回想録『沈黙のたたかい』(1967)さらには晩年に企画されたジル・ブラジーとの対談において、『海の沈黙』が世に出る過程を詳細に明かしている。彼は印刷を、あえて人目につく表通りに店を構える業者に依頼した。ゲシュタポの裏をかく大胆な戦略だ。首尾よく刷り上がった原稿は、確実に信頼がおけるごく少数の知人の手で慎重に製本された。ナチスの禁書政策の過酷さを窺わせる興味深い逸話の数々が披露されているが、とりわけ注目すべきは、出来上がった本の配布に関してヴェルコールが立てた確固たる方針である。

今やなすべきはそれらを配布することである。肝心なのは、各界の名士たちの手に届けることだ。彼らを勇気づけ、説き伏せることに意義がある(BS, p.213)⁴⁾。

順次作成された「各界の名士」の配布リストのなかでもヴェルコールが最も重要視したのは、「新フランス評論」(N.R.F.)の前編集長ジャン・ポーラン(1884 - 1968)がまとめた文壇関係のリストだった。ヴェルコールはブラジーとの対談で、『海の沈黙』には作家たちへの具体的なメッセージが込められていることを、作品の解説をも絡めながら率直に語っている。

{……} 私がこの物語を書いたのは、あの連中の魅力に惑わされてはならないということを読者たち、とりわけ作家たちに理解してもらうためでした。“フランスの親友”オットー・アベッツ、ドリュ・ラ・ロシエルと彼が率いる「新フランス評論」、そしてエルンスト・ユンガー。その著書『庭と道』

4) Vercors, *La Bataille du silence — souvenirs de minuit* —, Les Editions de Minuit, 1992.
本論においてBSの記号とともに記載される頁数は、すべてこのテキストのものである。

は我が国に対する優しさと愛情に満ちたものです。だがお人好しのユンガーは所詮ナチスの共犯者でしかありません。それは物語の最後にヴェルネル・フォン・エブレナクが悟る彼自身の姿でもあります。あの若い娘とそのおじに心を開いてもらおうと努力することで、彼はそうとは知らずにフランスと人類の最もおぞましい敵に加担していたのです⁵⁾。

親仏家を任ずる二人のドイツ人の名前とペンによる対独協^{コラボラシオン}力に奔走したフランス人の名前が、ここで具体的に引き合いに出されている⁶⁾。彼らの存在に象徴されるナチスの文化的な懐柔策がいかに欺瞞に満ちたものであるか、ヴェルコールはほかでもない作家たちにこそ、その実態を訴えかけたかったのだ。『海の沈黙』は不特定多数の読者を想定した小説であると同時に、限られた特定の読者に向けて命懸けで放たれたメッセージでもあった。ナチスの懐柔政策に気づかない、あるいは気づかないふりをしている同業者たちに、彼は小説をとおして真実を告げ、自戒を促そうとしたのではないか。熾烈なメッセージ性が小説のフォルムをいささかも損っていない点に、この作品の不思議な魅力を解く鍵が潜んでいる。

占領下で本を出版することの意味

占領下という過酷な状況に立たされた作家たちの行動について、レジスタンスか対独協力が、という二者択一的な評価を単純に下すことはできない。多くの作家が二つのイデオロギーの狭間で日和見を決め込んだが、文学・芸術に名を借りた彼らの中立的態度は、結果的にナチスの文化統制を助長することになった。ヴェルコールは問題の在り処を見極めた上で、作家たちに厳しい要求を突きつける。

表立って公然と物が言えなかったため、公的な表現の企てはナチスへの奉仕に直結した。すべて彼らの都合のよいように解釈され、それに異議を唱えることはできなかったのだ。したがって、私たちに残された唯一の義務、唯一の信条は、ただ沈黙を守ることであった（BS, p.137）。

レジスタンスに関するヴェルコールの基本姿勢が、ここで端的に表明されている。たとえ内容が中庸を得たものであっても、ナチスの検閲を経て出版された時点で、その作品は対独協力の性格を帯びてしまう。占領下で本を公に出版することは、ナチスのプロパガンダの先棒を担ぐ行為にほかならない。作家には、「思想の純潔性」を保つために「沈黙」する勇気が必要である。

だが売り出し中の作家にとって、「沈黙」によるブランクは「ゼロからの再出発」を意味しかねない。読者を持つことに作家の存在意義があるとすれば、出版という行為は彼らの本能的欲求の発露であるとも言えるだろう。ナチスはこうした占

5) *A dire vrai — entretiens de Vercors avec Gilles Plazy*, François Bourin, 1991, pp.32-33.

6) これら三人の名前が『海の沈黙』に盛り込まれることはなかったが、「善良で従順なドイツ人」として描かれたエブレナクには、作者も認めるように、ユンガーの姿が色濃く投影されている。

領下の作家たちの“生理”につけ込み、甘言を弄して彼らを抱き込もうとしたのである。その一方で、『海の沈黙』において指摘されたように、巧妙に仕組みられた禁書政策が着実に進行しつつあった⁷⁾。

レジスタンスの活動家たちとの交遊を通じて、ヴェルコールはナチスの“飴と鞭”の政策に精通していた⁸⁾。彼が占領下での合法的な出版行為に一貫して非を鳴らし続けた点には、充分留意しておきたい。彼の非難の矛先は、当然雑誌や出版社にも向けられた。戦後、出版粛清委員会の場でヴェルコールがひとり強硬にガリマール社を糾弾した事実は示唆に富んでいる。『沈黙のたたかい』中では、ナチスに迎合したとして、雑誌や出版社が名指して非難されている。なかでも最も責任の重い対独協力系紙誌として挙げられたのが、「オ・ピロリ」紙、「ジュ・スイ・パルトゥー」紙、「グランゴワール」紙、そして「ラ・ジェルブ」誌だった。

『海の沈黙』が小説であると同時に占領下の作家たちへの切羽詰まったメッセージであるとするれば、そうした占領下の作家のひとりであったコクトーへの言及にも何らかのメッセージ性が込められている可能性がある。姪のスカーフのデザインに関する記述を思い起こそう。そこでは「不気味な (inquiétant)」という形容詞、あるいは「無気力に (avec mollesse)」という副詞句が用いられていた。小説中の「ジャン・コクトー」には、明らかにネガティブなニュアンスが付与されている。占領下のコクトーの姿、さらに言えば『海の沈黙』が執筆された当時のコクトーの姿は、ヴェルコールの目に一体どのように映ったのだろうか。

占領下のコクトー

1989年4月、コクトーの生誕百年を機に、彼が占領下で書き続けた日記が出版された⁹⁾。その際に耳目を集めたのは、ヒトラー礼賛とともられかねない記述の数々だった。コクトーはこの独裁者を形容する際、「平和主義者」、「志半ばで圧殺してはならない」人物、さらには彼にとって特別な意味を持つはずの「詩人」という言葉さえ用いている。もっとも、こうした言葉を文脈の流れの中で捉えた時、そこに賛美のニュアンスはさほど感じられない。あくまでも傍観者の見地から綴られた閑話的な記述と見るべきだろう。ヒトラーに関する知り得る限りの情報をもとに、コクトーはその時々で筆を走らせたにちがいない。そうした知識は主に、旧知の間柄にあった彫刻家アルノ・ブレーカー (1900 - 1991) からもたらされた。ブレーカーはヒトラーの寵愛を受けた第三帝国の芸術家だった¹⁰⁾。

7) 駐仏大使オットー・アベッツが作成した禁書目録、842人のユダヤ人作家あるいは反ナチスの作家名が掲載されたいわゆる「オットー・リスト」が1940年9月以降、ナチス及びヴィシー政府の禁書政策の指針となる。ヴェルコールは『沈黙のたたかい』の中で、その横行を許した当時の出版界への痛烈な批判を展開している (BS, pp.161-162)。

8) 『海の沈黙』中では「機嫌をとって眠らせる」という印象的な表現が用いられているが、ヴェルコールは『沈黙のたたかい』の中で、あるドイツ人が口にした「私は私の仇敵に接吻する。ただし、それは相手を窒息させるためだ」というラシーヌの詩句を、ナチスの“飴と鞭”の政策を象徴する言葉として紹介している (BS, p.182)。

9) Jean Cocteau, *Journal (1942-1945)*, Gallimard, 1989. 本論において引用・言及される頁数で略号が付されていないものは、すべてこのテキストの頁数である。

10) コクトーはヒトラー (1889 - 1945) とブレーカーの関係を自分とジャン・マレー (1913 -

パリが陥落したのは1940年6月14日だが、この時期からヴェルコールが『海の沈黙』を脱稿した1941年10月にかけてのコクトーの動向について具体的に見ておきたい。彼は集団避難の末、スペインに程近いベルピニャンで1940年の夏を過ごしたが、9月にはパリに戻り、新たに借りていたバレ＝ロワイヤルのアパートマンに居を構える。この年の冬、コクトーは集中的な阿片の解毒治療に取り組んでいる。占領下で、しかも体調がすぐれなかったにもかかわらず、詩人の旺盛な創作活動に翳りは見られなかった。

『タイプライター』(1941)の初演に『恐るべき親たち』(1938)の再演、韻文劇『ルノーとアルミード』(1943)が執筆されたのもこの時期である。当時のコクトーの主たる関心は舞台にあった。当然演劇もナチスの検閲を免れ得ない。客席には軍服を着込んだドイツ人の姿も見られたことだろう。ヴェルコールの渋面が目には浮かぶが、こうしたコクトーの戯曲が対独協力系紙誌や親独義勇隊から目の敵にされていたことも忘れてはなるまい。とりわけ「ジュ・スイ・パルトゥー」紙のコクトー批判は熾烈を窮めたものだった¹¹⁾。先述したように、同紙はナチスの提灯持ちとしてヴェルコールに名指しされた紙誌のひとつである。対独協力系紙誌の攻撃に晒され続けたコクトーに対して、『海の沈黙』の作者が同情の念を抱くことはなかったか。

ヴェルコールの目に映ったコクトー

占領下という危機的な状況が反映されたコクトーの著作として注目されるのは、1940年の12月に発表された「青年作家たちへの提言 精神の領土」という題名の小文である。その中で彼は、占領下の若手作家たちに次のように呼びかけている。

精神の領土を防衛しようじゃないか。それを侵犯しようとしているのは、私たちの同胞なのだ。韻文も散文も、一行たりとも削除を許してはならない¹²⁾。

この「提言」の中で、コクトーはナチスの意向を受けたヴィシー政府の文化統制を声高に告発した。こうした困難な時期にこそ、「身を隠す」ことなく「小雑誌を創刊し、劇を上演する」よう、彼は若者たちを鼓舞する。ナチスの禁書政策を

1998)の関係に警えている(p.138)。パリで開催されたブレーカー展(1942年5月)にコクトーは友人として「歓迎の辞」を寄せたが、その行為は、彼の対独協力を指摘する際にしばしば引き合いに出された。ブレーカーに関しては、彼が「ヒトラーに対する自らの影響力を絶えずフランスのために行使し」たことも忘れてはなるまい。収容所に送られた者たちの数多くの命が彼の手によって救われたことを、コクトーは日記中で強調している。

11) 同紙の演劇時評を担当していた作家アラン・ロブロー(1898 - 1968)の執拗な中傷行為に、ジャン・マレーの堪忍袋の緒が切れる。彼はコクトーの制止を振り切り、レストランで偶然出くわしたロブローを殴打したのである。のちにフランソワ・トリュフォーは、この事件(1941年6月)を映画『終電車』(1980)の中で取り上げている。

12) J.-J. Kihm, E. Sprigge et H.C. Béhar, *Jean Cocteau — l'homme et les miroirs —*, La Table Ronde, 1968, p.421.

間接的に糾弾する詩人の言葉は、『海の沈黙』の作者の意向にも沿うものだろう。だが、ヴェルコールが対独協力にあたりと断じた占領下での出版や上演をコクトーが奨励している点に、二人の作家の現実認識の違いが認められる。

さらに注目すべきは、この提言が半年前に発刊されたばかりの「ラ・ジェルブ」誌に掲載された点だ。同誌は「ジュ・スイ・パルトゥー」紙と並んで、ヴェルコールが断罪した紙誌の中に名を連ねていた。ナチスの文化統制を告発する勇気ある発言者と対独協力系紙誌への寄稿者。コクトーの「提言」を目にしたであろうヴェルコールは、詩人の内に彼にとっては相容れない二つの顔を認めたにちがいない。

社交界の寵児としてもてはやされた若年時より、コクトーはさまざまな分野で膨大な交友関係を築いてきた。「友情」を自らの行動の指針とする稀代の社交家は、ヴィシー政府の要人のほぼ全員と知り合いであったことを認めている¹³⁾。対独協力派の作家と見なされていたサッシャ・ギトリ(1885-1957)やポール・モーラン(1888-1976)とは旧知の間柄で、アベッツ(1903-1958)やユンガー(1895-1998)とも交友があったコクトーだが、その一方で彼はレジスタンスの詩人、ルイ・アラゴン(1897-1982)やポール・エリュアール(1895-1952)とも良好な関係を築いていた。詩人マックス・ジャコブ(1876-1944)が強制収容所に送られた際に助命嘆願運動の先頭に立ったのも、やはりコクトーだった。

レジスタンス側と対独協力側の双方に張りめぐらされた複雑な“コクトー・コネクション”は、恐らくヴェルコールを眩惑し尽くしたことだろう。1943年10月1日付けの日記中に見られるコクトーの言葉は、占領下の彼の立場を端的に言い表している。

「対独協力を行っている」として、イギリスのラジオが私を非難している。ナチスの傘下にあるフランスの新聞は、ド・ゴール派として私を非難している。政治との係わりを拒否し、おまけに政治の知識をまったく持ち合わせていない自由な精神は、否応なくこうした事態に見舞われてしまう(p.372)。

レジスタンス側と対独協力側の双方から非難を浴びたコクトーだが、そこには彼独自の曲芸的ともいえるバランス感覚が働いている。古典と前衛、秩序と無秩序。思えばコクトーが何よりも重んじた“詩”は、相反する要素の狭間にこそ顕現するものだった。パリ解放後、旧知の神学者ジャック・マリタン(1882-1973)からレジスタンスに加わらなかったことを責められた際に、コクトーは「たとえ非合法にせよ公的な組織に加担はできない(p.587)」と答えた。この言葉を単なる強弁と捉えるべきではない。コクトーが自らの身の処し方として常々“一人一党”を標榜していたことは、記憶されてしかるべきである¹⁴⁾。

13) ベタンの後継者と見なされながら1942年のクリスマス・イヴに暗殺されたフランソワ・ダルランはコクトーの従姉の夫にあたる。ヴェルコールは『海の沈黙』中で、実名を挙げてはいないものの、「提督」という軍職名でダルランに言及している(Cf. SM, p.51)。

14) 1944年11月13日の日記中に、「私のリズムは、多くの友人に取り囲まれながら孤独にいるこ

日記の言葉に戻ろう。コクトーの政治に対する距離の取り方がそこから読み取れる点に注意したい。それは次に見るヴェルコールの政治観と鋭く対立する。

良心的な配慮ゆえに政治から距離を置き、他人に政治を委ねる。それも政治的行為であることに変わりはない。しかも最悪の政治的行為だ。なぜなら、それは良心に欠ける連中を野放しにすることにつながるのだから。私にはこうしたことが判りかけていた（BS, p.35）。

戦後、コクトーは映画解放委員会からも、作家協会の粛清委員会からも、対独協力に関して「嫌疑なし」の裁定を受ける。その時、裁く側にはヴェルコールの姿があった¹⁵⁾。

“潔癖な精神”と“自由な精神”

今や『海の沈黙』中に挿入されたコクトーへの言及が意味するところは明らかだろう。スカーフにデザインされた「無気力に互いを指さし合う不気味な十本の手」とは、ヴェルコールの目に映った占領下のコクトーの姿の象徴にほかならない。画家コクトーは自身の手を好んでモチーフにしたが、そのすらりと伸びた長い指先がある時はレジスタンスの側を指し、またある時は対独協力の側を指す。コクトーのデザインを目にしたヴェルコールは、こうした時局に即したイメージをそこに重ね合わせたにちがいない。

ヴェルコールにとって、いや作家を志す素描画家ジャン・ブリュレールにとって、作家として、そして画家としても多彩な輝きを放ち続けるコクトーは¹⁶⁾、善きにつけ悪しきにつけ常に気になる存在であったはずだ。占領下の文壇や画壇、そして若者たちに対して、コクトーは独自の影響力を保持していた。それゆえに、詩人の言動に方向性の欠如を見たヴェルコールには内心忸怩たるものがあつたにちがいない。小説中における唐突なコクトーへの言及には、ヴェルコールの苛立ちにも似た感情が反映されているように思える。『海の沈黙』には、“潔癖な精神”を守るために地下に潜ったヴェルコールから“自由な精神”でもって占領下を浮遊するコクトーへの、文学のかたちを借りた真摯なメッセージが織り込まれていたのである¹⁷⁾。

（福井大学助教授）

とだ」という言葉をコクトーは記している（p.574）。

- 15) 占領下でのコクトーとヴェルコールの具体的な接点については不明な点が多い。『沈黙のたかい』の中でも、ブラジャーとの対談の際にも、ヴェルコールはコクトーの名前を出していない。一方、占領下のコクトーの日記にヴェルコールへの言及は見られないが、戦後両者の間に交友があつたことは、コクトーの日記集『定過去』*Le Passé défini*から窺える。
- 16) 占領下の1941年4月に、ギャルリー・ルイ・カレで「ジャン・コクトー展」が開催されている。画家コクトーが得意とした線画作品が一同に集められた。
- 17) コクトーはエリュアールを介して「深夜叢書」を入手したらしい（Cf. *Le Passé défini* (1953), Gallimard, 1985, pp.365-367）。ヴェルコールからエリュアールへ、エリュアールからコクトーへと手渡された『海の沈黙』。そこに刻まれた自らの名前を、コクトーはいかなる思いで目にしたのだろうか。